

利別目名川採集の土器について

寺崎康史¹⁾

Pottery sherds from the River Toshibetsumena-gawa

Yasufumi TERASAKI¹⁾

1. はじめに

後志利別川水系においては、現在のところ約70カ所の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が知られている。これらは旧石器時代から近世にかけてのものであるが、この中でも、縄文時代の遺跡が占める割合が高いことは、今金町内に所在する遺跡55カ所のうちの約7割にあたる38遺跡が縄文時代の遺跡であることから推察される。しかし、縄文時代の遺跡については、これまで北桧山町豊岡遺跡（河野ほか、1962）、同町大谷地遺跡の調査例があるのみであり、未解明の部分が多いのが現状である。

さて、ここに紹介する資料は今金町字神丘在住の重田 実氏が利別目名川において採集していたものである。採集資料とはいえ流域周辺の縄文時代を解明するうえで貴重な資料であるためここに紹介する。

2. 採集地点とその資料

採集地点は今金町字神丘に位置し、後志利別川と利別目名川との合流点付近の利別目名川河床である（第1図）。採集者である重田氏によると同地点より土器・石器が発見されることは子供の時から知っていたが、興味を持って本格的に収集し始めたのは1989（平成1）年頃からであるという。採集地点は、平常は土砂が溜まって小規模な中州を形成しているが、大雨などで川が増水した際にはこの土砂が洗われ土器等が収集しやすいという。

利別目名川は後志利別川の支流であり、全長約16kmで、メップ岳付近をその源とする。旧河川流路は今金町と北桧山町の町界となっている。遺跡が所在する神丘地区は、南に後志利別川、東に同支流のトマンケン川、西に目名川が流れ、これらに囲まれた三角形の地域に4段の段丘面が発達している。これらのうち、上位の3段は扇状地が段丘化したも



第1図 採集地点と周辺の遺跡

（×印：国土地理院発行5万分の1地形図「瀬棚」を使用）

¹⁾今金町教育委員会。Imakane Board of Education., Imakane, Hokkaido, 049-43 Japan.

のであるとされる(日下, 1990)。各段丘面の縁辺に旧石器時代から縄文時代の遺跡が20カ所程分布する。利別目名川左岸の段丘面上には5カ所の遺跡が分布し、これらの地点からは縄文時代前期～後期の土器片が採集されている(寺崎, 1989)。

以下に採集遺物の説明を行なう(第2～4図)。

1は器厚が4mmと薄く、焼成は良く、堅緻である。口唇は尖り気味である。口縁部には横走する2条の微隆起線が、その下部には左下がり4条、右下がり1条の斜行する微隆起線が貼付される。横走する微隆起間には縄の圧痕が認められるが、原体および施文方法は不明である。縄文時代早期後半の中茶路式に分類される。

2の口縁上端部には縄端部が押捺されている。LR原体を軸に巻き付けたものを回転したものであろう。同じ原体により施文方向を変え、交差させている部分がみられる。

3はRLの原体を軸に巻いた絡条体圧痕文が口縁部下に4段観察される。

4は口縁部を欠くが上部に0段 ℓ の縄を巻いた絡条体圧痕文、下部にRLとLRの縄文が交互に回転された羽状縄文が施される。絡条体圧痕文の上方にも縄文がみられる。

5は口縁部上部にはRL原体を軸に巻いて回転した撚糸文が施されている。その下に羽状縄文が施されるが、器面の磨滅のため原体は不明である。

6の施文原体については、条と条の間隔が空いていること、同じ単位が繰り返し観察されることから、1段 ℓ の撚糸文を回転を変えて羽状に施文しているのではないかと考えたが、美沢3遺跡出土の土器文様の観察で得られた自縄自巻の原体による縄文(遠藤, 1989)という方が蓋然性が高いので、RLの自縄自巻と考えられる。

7は口縁部にかなり近い破片である。表裏ほぼ同じ位置に縄端部の押圧が施され、その下部にはRLの斜行縄文が施される。裏面には指頭による圧痕がみられる。焼成は良く、堅緻である。2～7は縄文時代早期後半の東釧路IV式に分類される。

8は磨滅が激しい。胎土に繊維を含み、横走する太い縄文が特徴的である。器面に残された縄の太さは8mmであり、原体は不明である。縄文時代前期初頭の綱文式のグループである。

9は口縁部はわずかに外反する。口唇部に刻み目があり、ループ文が施される。

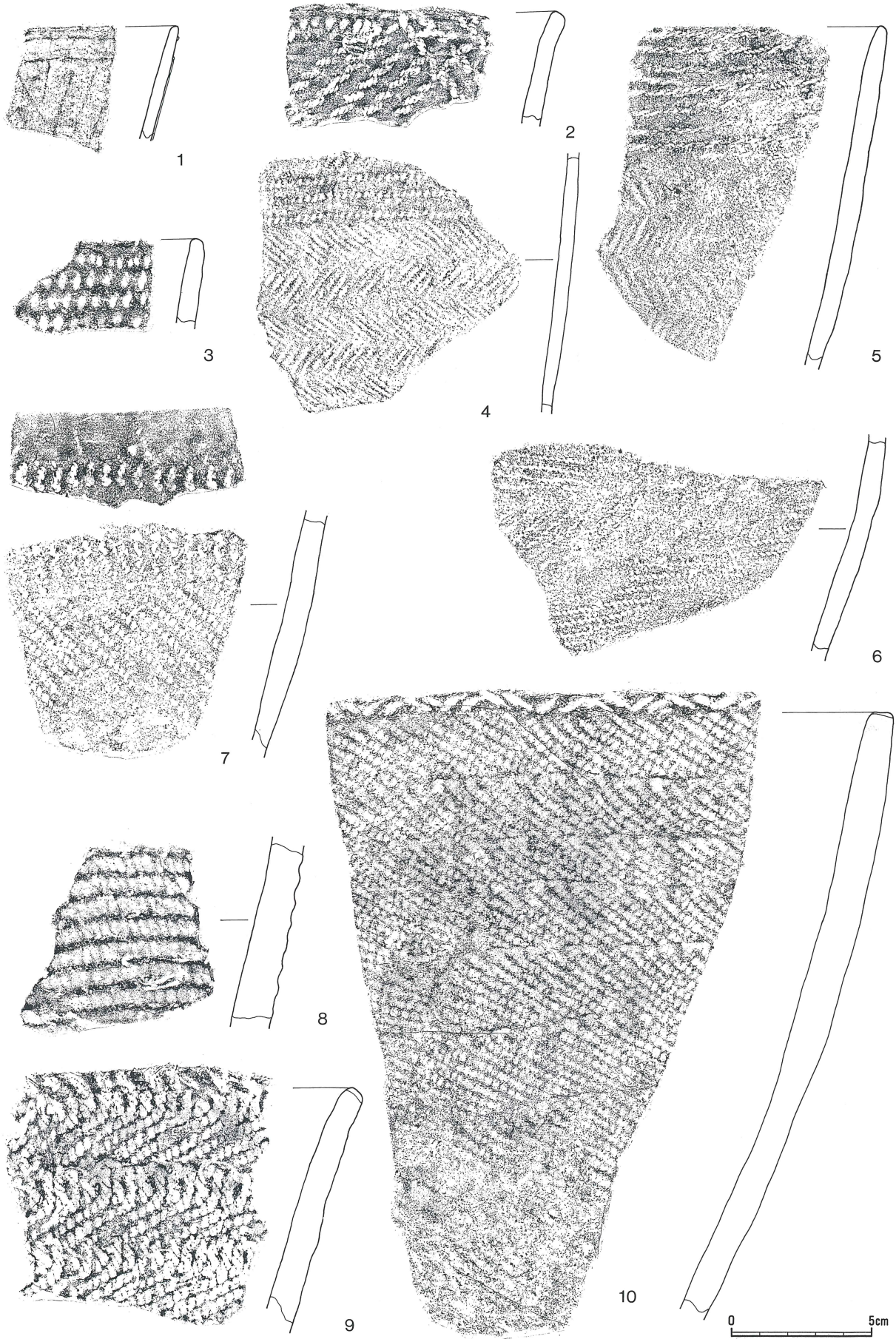
10は縄端部がはっきりと現われる斜行縄文である。口唇部に刻み目がある。9・10は縄文時代前期前半期の石川野式に比定できよう。

11は胎土に繊維を含み、器厚は16mmと厚い。0段多縄の太い原体が施文されている。円筒下層a式に比定され、江差町椴川遺跡出土資料に類似すると思われる。

12も繊維を含む胴部破片である。LRの斜行縄文が施文された円筒下層cまたはd式と思われる資料である。

13・14・15は地文に縄文を施し、沈線を加える一群である。13は口縁部が肥厚し、口唇部には半截竹管状工具による沈線が加えられる。地文はLRの縄文が施され、口縁部付近に浅い沈線が1条認められる。15は13に類似する口縁部形態を有するが、より外反する。磨滅が激しく、地文の原体は判然としないが、斜行縄文が施されている。4～5条の平行する沈線文が弧を描いている。14は胴部破片で、地文に縄文を施し、半截竹管状工具により渦巻き文様を描いている。これらは縄文時代中期の後半期榎林式に類似する。

16は地文にRL原体の縄文を施し、隆帯による装飾が加えられるものである。隆帯上部に3条、下部に2条の平行する沈線が施されている。隆帯上には斜め方向からの刺突が加えられる。器面の色調は淡黄褐色をなし、胎土はやや砂質である。裏面の調整は平滑になされている。大安在B式と思われ、13～

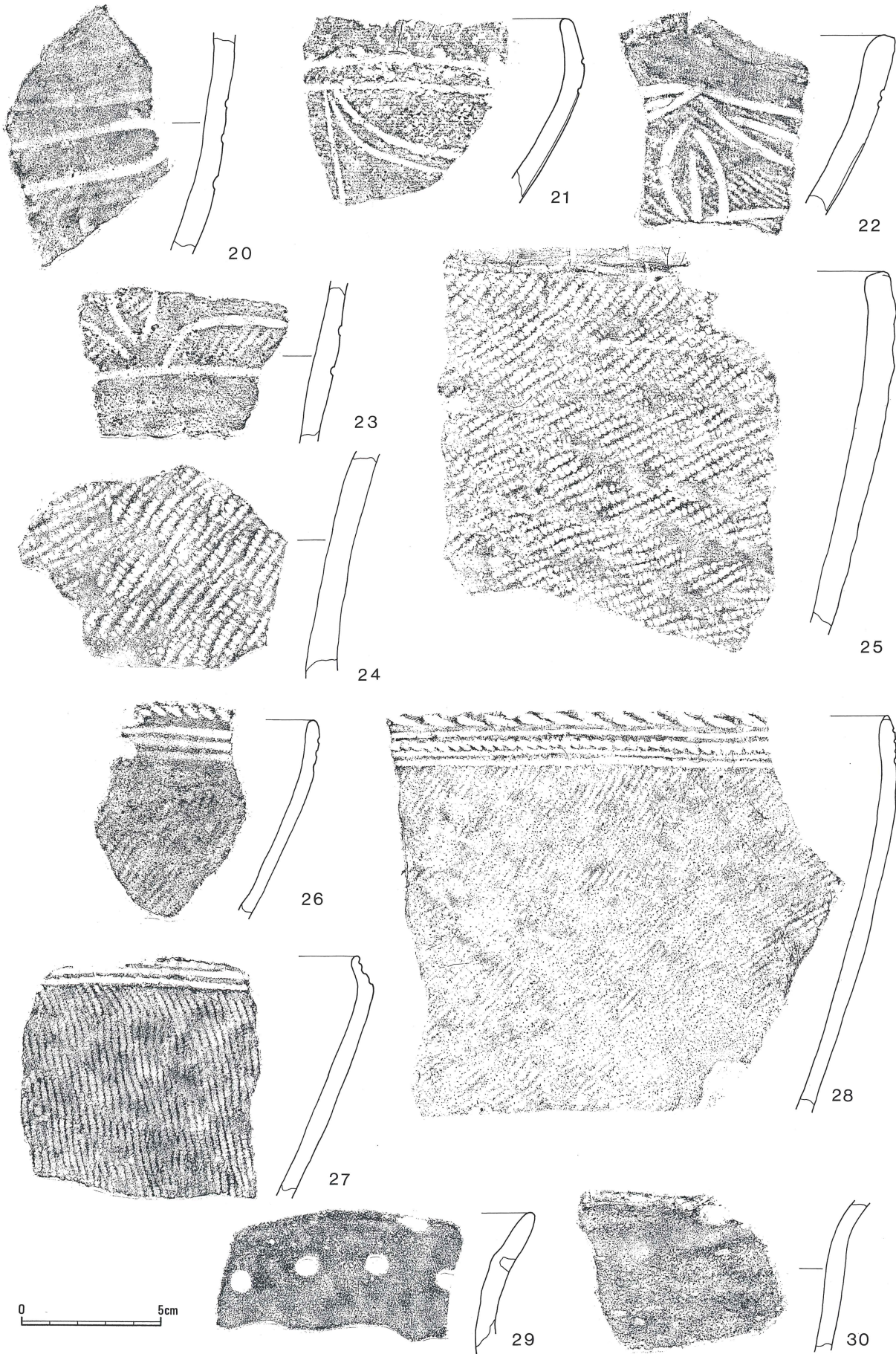


第2図 利別目名川採集の土器 (1)



第3図 利別目名川採集の土器 (2)

利別目名川採集の土器について



第4図 利別目名川採集の土器 (3)

15と近似する時期のものであろう。

17・18はともに隆帯文を有する胴部破片である。17は隆帯上に縄を縦位に押捺している。18の地文には0段多縄LRによる回転を変えた羽状縄文が施されている。この原体と同じものが縄線文として隆帯上に押捺されている。ともにノダップⅡ式に類似する。

19は底部破片で、貼付帯が観察され、LRの縄文が施される。中期後半期煉瓦台式に相当するものであろうか。

20は地文としての縄文が認められない。沈線によって曲線、直線が描かれている。後期前葉の入江式であろう。

21～23は沈線により区画された文様帯を有し、その中に弧線を連結して文様を描き磨消手法を用いている一群である。21は浅鉢形を呈するものであろうか。22は口縁部に山形の隆起部を有している。頸部にくびれをもつ深鉢形を呈するとみられる。24は胴部破片で、地文にはLR斜行縄文が施されている。21～24は後期中葉手稻式である。

25は口唇の断面は内面にむかって丸みを帯びている。器面にはLR斜行縄文が施される。後期後葉堂林式に対比される。

26は口唇に斜方向の刻み目、口縁部に3条の沈線をもつ深鉢形土器である。

27は口縁直下に肩部を有し、この幅の狭い肩部に3条の沈線がみられる。3本のうち中央の沈線を除く上下の沈線上に右側から刺突が加えられている。半截竹管様工具によるものと思われる。RL原体の縦行する縄文が施されている。

28の口唇部には26同様の斜方向の刻み目を有する。口縁部には4条の沈線文があり、上から2番目の沈線上に27同様の工具による刺突が加えられている。この場合右側斜め下方からの刺突である。26～28は晚期中葉大洞C₁式である。

29は口唇断面が丸く、口縁部に外から内への突瘤がみられる。北大Ⅱ式以降の擦文文化初期のものと思われる。30は無文の土器である。口縁部を欠くが、頸部付近の破片と思われる。形態から擦文文化期のものとして判断した。

3. まとめ

以上、採集された土器片の主なものについて、観察し得た事項を述べたが、ここで次の点に触れ、本稿のまとめとしたい。

土器の器面は水の影響による磨滅を受けているものの、10・11・28のような大きな破片が採集されていることなどから、採集地点よりさほど離れていない地点に本来の包含層があるものと考えられる。筆者も採集地点およびその上流域を何度か踏査したが、包含層が削られているような露頭は発見できなかった。利別目名川は1929（昭和4）年ごろ現在の流路への河川切り替えが行なわれており、それ以降も堤防構築、護岸工事などがあり、その過程で破壊された包含層由来の土砂が中州状に堆積し、現在に至っているとも考えられる。

採集された土器片は約160点に及び、縄文時代早期前半期を除いて道南地方において知られている縄文土器の型式がほぼ揃っていることになる。特にこの中で量的に多いのは、早期末の東釧路Ⅳ式から前期前半期の石川野式にかけてのものである。前期前半期の土器片は神丘17遺跡においても表面採集されており、北桧山町大谷地遺跡からも前期初頭と思われる山形押型文、綱文式、春日町式の土器が発掘されている。このほか筆者が知りうるいくつかの知見も加えて判断すると、北桧山町豊岡から利別目名川にかけては縄文時代早期末から前期前半期の遺跡が多く分布するようである。このことは縄文

海進といわれる気候の温暖化による海岸線の後退と無関係ではないであろう。

また、採集土器の中には縄文時代に後続する続縄文文化期の恵山式土器や、さらに新しい擦文土器がある。前者は鈴岡1号洞窟からも採集されており類例はあるが、後者は今金町では未発見のものであった。この両者の存在から、利別目名川周辺では縄文時代以降も断片的ではあるが先史時代人の生活が連続と続いていることが判明した。神丘2遺跡の旧石器時代の発掘調査の成果も考え併せるならば、神丘地区においては、いまからおよそ2万年前の旧石器時代から7世紀頃の擦文文化期までヒトの足跡が辿れるのである。それ以降のアイヌ文化期の遺跡が発見される日も遠からず来るであろう。

今金町は1997（平成9）年をもって自治制施行100年を迎える。開拓当初の先人の労苦は筆舌に尽くしがたいものがあったであろうが、それ以前の絶え間無く続いた先史時代人の歴史があったことも肝に銘じておくべきであろう。

本稿を執筆するにあたっては、北海道教育庁生涯学習部文化課大沼忠春調査班主査、および八雲町教育委員会三浦孝一、柴田信一両学芸員にご教示を賜った。また、土器の拓本は山下かず子氏の手によるものである。最後になりましたが、毎夏、自宅近くの利別目名川にて土器を収集し続け、今回ここに紹介することを快諾していただいた重田 実氏に感謝申し上げます。

文 献

- 河野広道・原田 豊・河野本道・本田栄作，1962，北檜山町豊岡遺跡発掘報告．北檜山町教育委員会．72p.
- 寺崎康史，1989，今金町の遺跡．今金町教育委員会．45p.
- 日下 哉，1990，遺跡周辺の地形・地質．今金町教育委員会編，神丘2遺跡．今金町教育委員会．5-6.
- 遠藤香澄，1988，美沢3遺跡出土の早期の土器にみられる文様について．北海道埋蔵文化財センター編，美沢川流域の遺跡群Ⅱ，北海道埋蔵文化財センター．227-235.
- 大沼忠春・佐藤隆広・松田 猛・大沼あさ子，1976，元和．乙部町教育委員会．477p.

